

【通釈】

秋の一日般若寺を訪れ、皆で「秋の山は絵のようだ」という題で詩を賦す

〔晴の字を韻とする。左大臣様の仰せによって作る〕

秋の山はそのまま自然の絵画を構成する

数台の車と数騎の馬に乗った人々が晴天を喜びつつ般若寺を訪れる霧が山に青い色をほどこすさまは画家の筆遣いと変わらないではないか

山に生じる雲は無心に仕上げの白い色を添えるかのよう

あおい屏風のような山の色は高い嶺にかかる青い靄の色

音を立てて流れる谷川の辺に紅葉した林は錦の障子のようにめぐる今日の佳き日に山もきつと左大臣さまを讃えて万歳の声をあげるだろう

尊い僧侶が善し悪しを見立てたこの地は、末永く栄えるであろうから〔この寺は先祖から伝えられた善い土地である〕

【参考】

『本朝無題詩』巻五に収める藤原季綱「秋日偶吟」の第十五、十六句には本詩頷聯、頸聯の影響が認められる。

山展画屏雲後素

林摸錦障雨添丹

(二〇〇一年十月九日 受理)

山」《本朝文粹》卷九「七言暮秋陪左相府宇治別業即事」大江以言

◎登臨Ⅱ山に登ることと水辺に臨むこと。潘岳『秋興賦』に基づく表現。↓二十四「七言。九月尽日同賦送秋筆硯中応製」の「不欲登山：不要臨水」の語釈参照。

◎靚青Ⅱ青を見る。青は青色の絵の具。

◎筆力Ⅱ筆遣い、筆の勢い。「筆力嶽嶽 唐室之雄伯差肩」《本朝文粹》卷十「冬日遊雲林院西洞翫紅葉」大江以言

◎雲生Ⅱ山の気が石に触れて雲を生じる。「岡巒糾紛 触石興雲」

《文選》卷四「蜀都賦」左思

◎後素Ⅱ素は胡粉。絵を描くときは最後の仕上げに胡粉で白い色を入れる。「子夏問曰、巧笑倩兮、美目盼兮、素以為絢兮、何謂也。子曰、繪事後素」《論語》八佾「乃見贈倭漢両会写真画障各一張。容餐皆頭於後素、詞句足知其中丹」《本朝文粹》卷九「暮春藤亜相山庄尚齒会詩」菅原文時

◎人情Ⅱ人間の心、感情。「何謂人情、喜怒哀懼愛惡欲。七者弗学而能」《礼記》礼運「雖非人情、是以俗事」《本朝文粹》卷九「見遊女」大江以言「人情迎夜 頻傾鸚鵡之盃 鳥音調春 暗諧鳳凰之管」《本朝文粹》卷十「紅桜花下作応太上法皇製」大江朝綱

◎翠屏Ⅱあおい屏風。緑の山をたとえる。「香山石楼倚天開 翠屏壁立波環廻」《白氏文集》二三〇七「舒員外遊香山寺、数日不帰。

兼辱尺書。大誇勝事。時正值坐衙鷹囚之際、走筆題長句以贈之」《紈扇抛来青黛露 羅帷卷却翠屏明」《本朝麗藻》卷下「遙山斂暮煙」具平親王《和漢朗詠集》卷下「山」所収「山似屏風江似篆 叩舷来往月明中」《和漢朗詠集》卷下「山水」劉禹錫《千載佳句》居処部「泛舟」所収

◎嵩煙Ⅱ嵩山のように高い山にかかるもや。嵩山は五嶽の一。太室山

に同じ。「松抽靈幹雲連嵩高之煙」《本朝文粹》卷三「松竹策文」大江以言

◎錦障Ⅱ紅葉した林を錦の障子にたとえた。紅葉を錦にたとえるのは「關東有碧瑠璃之水、水辺有紅錦繡之林」《本朝文粹》卷十「冬日陪左相府少侯書閣同賦落葉波上舟」慶滋保胤などがある。

◎峽水Ⅱ谷あいを流れる水。谷川。「滄浪峽水子陵灘 路遠江深欲去難」《白氏文集》三二四五「家園三絶」「眼疲楚嶺陽台外 心在吳興峽水頭」《類題古詩》「山晴多秋望」紀齊名「ただし、白詩の例は三峽を流れる長江をいう。

◎呼万歳Ⅱ山が万歳を呼ぶ。漢の武帝が緱氏に行幸し、礼にしたがつて太室山に登ったところ、万歳と叫ぶ声が聞こえてきたが、山上にいる者も山下にいる者も、誰も万歳とは言っていなかった。そこで武帝は三百戸の邑を以て太室山を封じ、祀りを行わせた。君主が徳高いときの瑞兆をいう。「三月、遂東幸緱氏、礼登中嶽太室。從官在山下、聞若有言萬歳云。問上、上不言。問下、下不言。於是、以三百戸封太室奉祀。命曰崇高邑」《史記》孝武帝本紀「山呼万歳（漢武封梁甫時）洛出九疇（洛出書、孔安国云、河図即八卦是、洛書即九疇是）」《白氏六帖事類集》卷十一「祥瑞二」「山呼万歳空無識 水号千秋未足要」《本朝麗藻》卷下「夏日陪於員外端尹文亭、同賦泉伝万歳声」大江以言

◎前賢Ⅱ前代の賢人。般若寺を創建した観賢僧正をいうか。

◎相地Ⅱ土地の善し悪しを見て判断する。「遂好耕農、相地之宜、宜穀者稼穡焉。民皆法則之」《史記》周本紀

◎先祖所相伝Ⅱ相伝は代々伝えること。般若寺と大江家または藤原摂関家との関係は不明。『今昔物語集』卷十九第二十三には「般若寺ハ伝ハリテ知ル所ナレバ」とあり、諸注「師僧から伝えられた寺」と解する。

『本朝無題詩』巻五に収める藤原敦光「除夜独吟」其一には本詩の影響が認められる。

藤原敦光

大難札畢及深夜  
疎牖罷眠人定後  
一歲光陰惜不能  
閑思往事對殘燈

二十八 秋日遊般若寺同賦秋山似画图〔以晴為韻應左相府教〕

秋山自づから画図の成れるに似たり

軒騎登臨幾ナばくか晴れを喜ぶ

霧画き青を靨る筆力に非ずや

雲生じ素を後にす豈に人情ならんや

翠屏只嵩煙の色に任す

錦障更に峽水の声を添ふ

今日最も宜<sup>も</sup>べなり万歳を呼ぶこと

前賢の相る所地多く栄ゆ

〔此寺先祖所相傳之善地也〕〔此の寺先祖相傳する所の善地也〕

○ ○ × × × ○ ○

○×○○○×◎ (下平声清韻)

○○×××○○◎ (下平声清韻)

×  
○×  
○  
○×  
×  
◎  
(下平声清韻)

○○×○×○○◎（下平声庚韻）耕清同用

1, 般—盤(内) 2, 晴—清(京) —情(内、陽、東A、島、賀、鶴  
多) —情「ミセケチシテ晴ト傍書」(静) 3, 教—敢(賀) 4, 画—  
盡「ミセケチシテ画ト傍書」(東A) 5, 軒—斬(鶴) 6, 臨—陰  
(内) 7, 画—盡(内、静、無、東A、京) 8, 宜—亘(静、東A、賀、  
鶴、鶴) 9, 地—ナシ(山)

◎般若寺ニ洛西、鳴滝般若寺町にあつた寺。延喜年間頃、観賢僧正に

より創建。『蜻蛉日記』巻中で道綱母が籠もつた寺もここであつたらしい。「般若寺ハ伝ハリテ知ル所ナレバ、堂ノ未申ノ方ニ卯酉ニ大キナル房ヲ立タリ。節モ無キ材木ヲ以テ、微妙ク造タリ。西北ニ廊共ヲ造リ出シテ、本ヨリ面白キ所ヲ弥ヨ此ク微妙キ屋共ヲ造タレバ、関白殿モ渡ラセ給テ、可然キ上達部、殿上人ノ御前共ヲ召テ、文ヲ作ラセナムドシテ、世ニ有ラバ此様ニテコソハ有ラムト見ユ。若干ノ客人ノ日毎ニ不来又日ハ無シ。亦常ニ止事無キ所々ノ御修法ニ被召レ、亦可然キ御八講ナドニハ不被召事無シ」『今昔物語集』巻十九「般若寺の覺縁律師ノ弟子ノ僧、師ノ遺言ヲ信ナフ語第二十三」。「冬日往詣般若寺、見故藏闍梨旧房。中心之感触緒難禁。遂書所懷寄覺上人」『本朝麗藻』卷下 詩題 藤原公任」

◎秋山似画图―詩題の直接の出典は未詳。同様の発想の詩句に「湖上春來似画图」『白氏文集』二二三―「春題湖上」がある。

◎左相府Ⅱ左大臣の唐名。左大臣藤原道長をいう。

◎軒騎車と馬。『軒騎逶遲棹容与留連三日不能廻』《白氏文集》二

三〇七「舒員外遊香山寺，數日不歸。兼辱尺書。大誇勝事。時正值坐衙廝囚之際，走筆題長句以贈之」故今雖云軒騎之驟水驟

追い払い、新年を迎える。『内裏式』中、『儀式』十には「大儺」の項目を立てるが、『延喜式』には「追儺」とあり、『西宮記』十二月、『北山抄』二、『江家次第』十一等には「追儺」で項目を立てる。『西宮記』や『北山抄』によれば、その次第はおおよそ、夕刻天皇が南殿に出御し、皇族公卿たちに桃仗弓と葦矢が配られる。鬼を払う方相氏として大舍人の中から大柄な者を選ぶ。陰陽師が斎郎を率いて月華門より入り呪文を読み上げた後、方相氏が儺声を上げ、手に持った戈で楯を三度打つ。群臣もそれに和し、方相氏を追って行き、御前を渡った後、分散して退出する、というものである。

◎旧典＝古いしきたり。古い制度。「王若曰、君牙。乃惟由先正旧典時式」『書経』君牙「伏乞、鴻慈、勘考旧典、析戸邑之一半、支国用之錙銖」『本朝文粹』巻五「為九条右大臣請減職封表」菅原文時

◎萬戸千門＝多くの建物と門。広大な宮殿。「内則別嶠嶢眇麗、巧而聳擢、張千門而立萬戸。順陰陽以開闔」『文選』巻一「西都賦」班固「桂殿嶽岑對玉樓 椒房窈窕連金屋 三條九陌麗城隈 萬戸千門平旦開」『全唐詩』巻七十七「帝京篇」駱賓王「畿内畿外、皆報千門萬戸之歡娛」『本朝文粹』巻十三「朱雀院被修御八講願文」大江朝綱

◎禁眠＝大晦日の夜に眠らずに新年を待つこと。前掲北山論文によれば、大晦日の夜に眠らずにいるのは「守歳」と呼ばれる中国の風習だが、わが国平安朝には大晦日の夜明かしの習慣は無かったらしい。あるいは大儺の行事が深夜に及ぶため、その間眠ることができない程度の意か。

◎想像＝推し量る。「想像 ヲモヒヤル」『観智院本類聚名義抄』「舞水森茫 想像転波之袖」『本朝文粹』巻三「弁山水対策」大江澄

明

◎挙周陪殿上＝挙周は匡衡の息。陪殿上は六位蔵人となつて一条帝の側近くで仕えることをさすか。挙周の六位蔵人任官は寛弘三年三月四日。「寛弘三年四月四日。聖上於左相府東三条第被行花宴。余為序者兼講詩。講詩之間、左丞相伝勅語曰、式部丞挙周補蔵人者。風月以来、未嘗聞此例、時人榮之。不耐感躍、書懷題于相府書閣壁上」『江吏部集』巻中「二十一」九月尽日惜秋言志「子達遅」の語釈参照。

◎対燈＝灯火に向かう。灯火の下もの思いにふける。「夜深吟罷一長吁 老淚燈前濕白鬚」『白氏文集』三〇七「感旧詩卷」

◎愚叟＝愚かな老人。自謙の称。「洛陽有愚叟 白黒無分別」『白氏文集』三〇五「洛陽有愚叟」

◎流年＝過ぎていく年月。時の流れ。「共知欲老流年急 且喜新正仮日頻」『白氏文集』一三八二「歳仮内、命酒贈周判官・蕭協律」  
「二感流年心最苦 不因詩酒不消愁」『菅家文草』巻一「七月六日文会」

# 【通釈】

除夜の作

大儺の古いしきたりは久しい昔から伝えられている  
宮中の多くの殿舎では大儺が終わるまで眠ることができない  
今頃息子挙周は、帝のお側で行事に参加していることだろうが  
愚かな老人たる私は一人灯火に向かって過ぎゆく歳月に感じ入っているのだ

慙歎鬢如霜」(同二五八五「早朝」)「鬢毛遇病双如雪」心緒逢秋一

似灰」(同九四九「百花亭晚望夜歸」)「鬢霜先曙、送恨於蒲柳之秋」(『本朝文粹』卷五「為貞信公請致仕第二表」大江朝綱)

◎冷落Ⅱ落ちぶれること。もの寂しいようす。「蕭條残活計 冷落旧交親」(『白氏文集』一〇〇八「江南謫居十韻」)

◎風遲Ⅱ風は家風、門風、すなわち大江家代々の儒者としての家風をいう。「風遲」とは匡衡が祖父の維時や曾祖父の音人などのように公卿の地位に昇ることもできず、詩作にも満足できない状況のこと。「門風自古是樹林 今日文華皆尽金」(『菅家後集』「見右丞相献家集」)「風遲山尚響 雨息雲猶積 巢空初鳥飛 荇乱新魚戲……小臣信多幸 投生豈酬義」(『文選』卷二十「侍宴樂遊苑送張徐州応詔」丘遲)は単に風の勢いがおさまること。

### 【通釈】

初冬、諸君と談話する

冬のはじめ十月の暗く静かな夜

詩をよくする客五人が集まり語り合う

今夜それぞれ一篇の詩を作ることを相談し

また明日の庚申の夜、三戸を守って夜を明かすことを約束する

近衛府や左京職は宮中の高官

式部省の某と肥州国司はすばらしい文章の作り手

その中に一人、文章博士を勤める投げやりな気分の老人が一人

髪には白いものが混じり、落ちぶれて、なかなか家風を継ぐことができずにいる

二十七 除夜作\*

大饗旧典久相伝  
萬戸千門暫禁眠  
想像挙周陪殿上  
対燈愚叟感流年

大饗おほやういの旧典久しく相伝へり  
萬戸千門暫く眠りを禁ず  
想像たかひす挙周殿上に陪することを  
燈ぐさうに對ひ愚叟流年に感ず

### 【校異】

1, 作—征(内) 2, 萬—高「ミセケチシテ萬ト傍書」(東A) —方(鶴)

### 【押韻】

×○○×××○○(下平声仙韻) 仙同用  
××○○○○×× ×○○○○×○○(下平先韻) 仙同用  
××○○○○×× ×○○○○×○○(下平先韻) 仙同用

### 【制作年次】

転句「挙周陪殿上」より挙周が六位藏人に任ぜられた寛弘三年の大晦日か↓北山円正「大江匡衡「除夜作」とその周辺」(『神女大國文』第十一号 平成十二年三月)

### 【語釈】

◎除夜Ⅱ大晦日の夜。詩題としての「除夜」に関しては『白氏文集』に九五八「除夜」、一二五五「除夜」、二二六一「和除夜作」などが見える。↓北山円正「大江匡衡「除夜作」とその周辺」(『神女大國文』第十一号平成十二年三月)

◎大饗Ⅱ追饗に同じ。鬼やらい。大晦日の夜に行われる行事。疫鬼を

書】(祐) 7, 疎—跡(鶴)

【押韻】

○○××○○×    ○××○○×◎ (上平声之韻)  
○○○○○○××    ×○○××◎ (上平声脂韻) 支之同用  
×○○×○○×    ×○○××◎ (上平声之韻)  
○○×○○××    ×○○×○○◎ (上平声脂韻) 支之同用

【製作年次】尾聯の「翰林疎嬾叟」より、匡衡が三八歳で文章博士となつた永祚元年(九八九)以降の作。ただし「疎嬾叟」というのだから、二度目の文章博士任命の寛弘六年以降の方が妥当か。寛弘六年以降匡衡が亡くなるまでの間、十月の庚申は、同七年十月十五日。

【語釈】

◎談話||話すこと。「談話終日夕 觴至輒傾杯」(「乞食」陶潜)「初尋寺次逢僧。庭前徘徊、灯火談話」(『本朝文粹』卷十「晚秋過參州藥王寺有感」慶滋保胤)

◎幽閑||暗く静か。幽閑に同じ「夫天不可為林谷幽閑無人」(『墨子』天志上)「為不善乎幽閑之中者、鬼得而誅之」(『莊子』庚桑楚)

◎風客||風月の客。詩人、文人。「昔吳王好劍客、百姓多癰瘡。今大王好風客、群賢多会合」(『本朝文粹』卷十「暮春陪上州大王池亭、同賦渡水落花來」源順)↓二十四「七言。九月尽日同賦送秋筆硯中」中「製」の「風客」の語釈参照。

◎題一絶||絶句一首を作る。ただし、本詩は七言律詩。本詩とは別に絶句を作ったか。「将帰一絶」(『白氏文集』三〇六六詩題)「赴和州於武昌県再遇毛仙翁一八兄、因成一絶」(『全唐詩』卷三百六十五 詩題 劉禹錫)

◎守三戸||庚申の夜、三戸虫が眠っている人の体内から抜け出て天帝にその人の悪事を報告すると信じられていた。そこで一晩中眠らず体内から三戸虫が出るのを見張った。三「暮秋左相府東三条第守庚申同賦池水浮明月詩」の「庚申」及び、四「七言 歳暮於藤少侯書齋守庚申同賦明月照積雪」の「三戸」の語釈参照。「年衰自無睡 不是守三戸」(『白氏文集』一三〇七「不睡」)

◎羽林馮翊||羽林は近衛府の唐名。馮翊は左京職の唐名。

◎鷓鴣侶||鷓鴣は高位高官。「久別鷓鴣侶 深隨鳥獸群」(『白氏文集』九八六「黃石巖下作」)「于時貂蟬交領 鷓鴣成行」(『本朝文粹』卷九「仲春釈奠聽講古文孝經同賦夙夜匪懈」大江澄明)「于時龍象談論 鷓鴣遊樂」(『江吏部集』卷上「七言夏夜陪左相府池亭守庚申同賦池清知雨晴應教」)

◎吏部肥州||吏部は式部省の唐名。肥州は肥前国あるいは肥後国の国司。寛弘七年三月に大江忠孝が肥後守に任じられているが、文人であつたことは確認できない。匡衡との関係も不明。大学寮出身者で肥前国国司となつた人物としては、永延元年に肥前国介(守力)から博士に遷つた中原致時がいる(『国司補任』による)。

◎翰林||翰林主人。文章博士の唐名。  
◎疎嬾||投げやりなこと。怠惰、ものぐさ。「不涉經学 性復疎嬾 筋驚肉緩」(『文選』卷四十三「与山巨源絶交書」嵇康)「老趁風花 応不称 閑尋松雪正相当……不擬人間更求事 些些疎嬾亦何妨」(『白氏文集』二九〇二「南龍興寺殘雪」)

◎鬢霜||白髪が目立つ髪。の毛。鬢の白髪を雪や霜に喩えるのは白詩にしばしば見える表現。

「莫学二郎吟太苦 纔年四十鬢如霜」(『白氏文集』一〇三三「聞龜兒詠詩」)「桜桃昨夜開如雪 鬢髮今年白如霜」(同「一二五」感桜桃花。因招飲客)「千載佳句」下「桜桃」所収)「漢庭方尚少

## 江吏部集試注(九)

木戸裕子

(承前)、(八)は『文献探究』第三十八号に掲載している。

### 凡例

一、底本は板本群書類従を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。

一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。

一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

- 内閣文庫(旧浅草文庫)本—(内) 山口県立図書館本—(山)  
陽明文庫本—(陽) 祐徳稻荷本—(祐)  
静嘉堂文庫本—(静) 神宮文庫本—(神)  
国会図書館本—(国) 無窮会図書館本—(無)  
東大図書館(E45 656)本—(東A)  
東大図書館(旧南葵文庫)本—(東B) 岡山大学図書館本—(岡)  
島原松平文庫本—(島) 東北大学図書館本—(東北)  
京大図書館本—(京) 多和文庫本—(多)  
賀茂別雷文庫本—(賀) 名古屋市立鶴舞中央図書館本—(鶴)  
本朝文粹(新日本古典文学大系)—(粹)  
本朝麗藻(校本本朝麗藻)—(麗)

一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。  
煙・烟 花・華 叢・蕨 窓・牕など。  
一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。  
一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

※本稿では巻上二十六番から二十八番までの詩を取り扱う。

### 二十六 初冬与諸君談話\*

|         |  |
|---------|--|
| 初冬十月幽閑夜 | 初冬十月幽閑の夜                                   |
| 風客五人談話時 | 風客五人談話の時                                   |
| 相議今宵題一絶 | 相議す今宵一絶を題し                                 |
| 亦期明日守三戸 | 亦期す明日三戸を <sup>さんし</sup> 守らんことを             |
| 羽林馮翊鷓鴣侶 | 羽林馮翊 <sup>ひょうよく</sup> 鷓鴣の侶                 |
| 吏部肥州錦繡詞 | 吏部肥州錦繡の詞                                   |
| 中有翰林疎嬾叟 | 中に翰林疎 <sup>そらい</sup> 嬾 <sup>おきな</sup> の叟有り |
| 鬢霜冷落思風遲 | 鬢霜零落し風の遅きことを思ふ                             |

### 【校異】

1, 君—ナシ(京) 2, 宵—霄(無、東A、山、祐、神、賀、鶴) 3, 戸—戸(内) 4, 明—ナシ「明ト傍書」(東A) 5, 翊—ナシ(陽、祐、鶴) —ナシ「一字分空白」(京) —ナシ「補入ノ〇印アリ」(東A、東B、神) —ナシ「脱字ト傍書」(山、賀) 6, 州—前「ミセケチシテ州ト傍